



写真準備中

背景

昭和47年（1972）7月4日午後から高知県中部の山間部では断続的に強い雨となりました。このため、香美市繁藤では、1時間に95mmの豪雨を記録するなどして、5日9時までの日雨量は742mmに達しました。この大雨により、繁藤では土砂崩れが相次ぎ、ついには高さ約100m、幅約200mの大規模な山崩れが発生し、死者・行方不明者60名を出す大惨事となりました。この土砂災害では、住民の救出活動をしていた消防団員が二次災害に巻き込まれました。この後、消防の補償制度をつくるきっかけとなりました。

アクセス 繁藤災害の慰霊塔

- JR繁藤駅より北東へ直線距離約200m
- 香美市土佐山田町繁藤
- 緯度経度 北緯33度40分56秒、東経133度41分37秒



繁藤は、豪雨が集中して降るため、古くから「雨坪」と呼ばれてきました。その雨坪で土砂災害が起こったのは昭和四七年（一九七二）七月五日のことでした。

午前六時、国鉄（現在のJR）繁藤駅前の人家の裏山がくずれました。その家で消防団員が避難作業を手伝っていた時に、再び山崩れが起こり、消防団員が生き埋めとなりました。山崩れが繰り返して起こることが心配される中、懸命の救出活動が続けられました。やっと生き埋めの消防団員の着衣が見え、ショベルカーを退避させ、手作業に移ろうとしていた矢先のことです。

午前十一時前に予想もなかった大山崩れが発生し、一瞬にして一〇万立方メートルの土砂が駅前付近を襲いました。この大災害により、一二軒の人家、停車中の列車、消防団の救出活動に駆けつけていた人々などが押し流され、死者・行方不明者は六〇人となりました。

消防団、県警、陸上自衛隊、国鉄、建設業者、医療班などが総力をあげて土砂の除去作業を行い、行方不明者の捜索を行いました。雨のため難航しました。捜索活動はその後九月下旬まで続けられましたが、全員を発見することはできませんでした。

最後の遺体が発見されたのは、半年後の翌年二月のことでした。下流の護岸工事中に発見されました。災害現場近くには遭難者のための慰霊塔が建てられています。